

アイボ (AIBO) の治療から学ぶ 心の修理・生き返ったAIBOの 里親探し

(株) 東和テクノロジー グローバル環境事業部

もうりし
の
毛利 紫乃

ソニーが開発したペット型ロボット、
アイボ (AIBO) は、1999 年 6 月に予

約販売の形で、発売されました (写真 1)。

初の家庭用自律型エンタテインメン
トロボットとして発売当時から大変話
題になり、開発陣の懸念をよそに国内
3,000 台が 20 分、米国 2,000 台が 4 日
で受注完売。25 万円と高額であったに
もかかわらず人々の関心の高さが示さ
れました。ところが、ソニーのロボッ



写真 1 初代 AIBO

ト事業の縮小により 2006 年に部門が閉
鎖され、2014 年にメーカーサポートが
打ち切られてしまいます。このサポ
ート期間の終了によって「うちの AIBO
の病気が治らない。不死であったはず
の AIBO が死んでしまう」という所有
者の思いが起こり、それを見かねた元
ソニー社員を中心とした有志の技術者
が自主的に AIBO の修理に対応され続
けています。

その活動母体が (株) ア・ファン～
匠工房～です。ア・ファンでは、取り
扱う対象を、例えば旧式部品の供給の
打ち切りによる修理サポート終了によ
り、所有者では対応ができなくなった
ような思い出の品、記念品、希少品とい
った「かけがえのないもの」に絞り込ん
でいます。AIBO のほか、家庭向けの
音響・記録機器を中心に、努力と誠意
(情熱) と技術をもったスタッフと依頼
主との協議の上に、既製パーツに頼ら
ない真の匠の技術力を活かしたオーダー
メイドリペアが行われています。技術
者もそれぞれの得意分野を持ち、全国
展開のみならず修理技術者の国際交流
にも貢献しています。

AIBO については修理部門を病院「愛
慕ドック」として設立し、所有者の心
に寄り添い、ここでは治療と呼ぶ修理
を行い退院させるほか、いよいよ役目
を終えた AIBO については修理部品の
再利用を献体として扱い、2015 年から
はいわゆる人形供養に当たる葬儀を行
なっています。元気になった AIBO に
ついて、里親探しとして新しい所有者

への仲立ちをするほか、また生体のセ
ラピーペットを導入することができな
い病院や施設などの活躍の場での新し
い「犬生」をサポートしています。

本誌特集「修理・修繕 よみがえるも
のの命」にて、ア・ファンの代表取締役
であるソニー技術者 OB でもある乗松伸
幸氏に、技術者としての思い、AIBO や
AIBO の飼い主さんへの思いをお聞きす
ることができました。ア・ファンの活
動の一つの柱、「AIBO の治療から学ぶ
心の修理・生き返った AIBO の里親探
し」として語られた内容を以下に届けま
す。ここではカンパニーロボットである
AIBO ならではの思いもありますが、車
や家、愛着をもち、使い続けたさまざま
なものについて同様の感覚をもたれるこ
ともあるのではないのでしょうか。あきら
めないことで何ができるか、さまざまに
考えていきたいと思います。

AIBOにみる「修理の心得」

～AIBOの献体、お葬式、ドナー移植、
里親探し～

(株) ア・ファン A・FUN (匠工房) 代表

のりまつ のぶ ゆき
乗松 伸幸

いつの間にか、「大量生産・大量消
費・大量廃棄」があたりまえになっ
てしまった今の世の中に、いや、そう
ではなかったはずだとの思いが募って
いました。日本の一番得意とした、もの
づくりの原点に戻った活動が大事では
ないか、と気づかされたことがわれわ
れの活動の原点です。「ものづくりは人
づくり」、これはソニーの設立者のメッ

セージです。ソニーの設立趣意書の文面には「一旦手掛けたるセット（製品）は最後までその責任を持ち いかなる煩雑なる要求に対しても快く応ずる」という言葉があります。そんな言葉を胸に、ソニーだけでなく他社の製品のビンテージモデルの復活を望む皆さまの気持ちに寄り添って、われわれは活動を続けるようになりました。

何よりも修理・修繕において絶対に忘れてはならないことはあきらめない努力です。われわれの座右の銘である「道は必ずある」です。いろいろな修理の依頼を受ける中で、依頼主の同意があれば状態の良い中古部品を使用して修理もします。依頼主の目的は、物の復活です。この目的を達するには、必要によっては新たに部品を作る努力もしますし、また、いかなる努力もできるとわれわれは自負しています。これは新品部品を使用するだけの修理をする「メーカー目線」ではなく、「依頼主目線」での活動です。

いろいろな電気製品が世の中に発表される中、使用者と製品の間にはさまざまな人生が構築されていきます。その一つに AIBO があります。最初は、アフファンがソニーの OB で構成している会社と気づかれた AIBO のオーナーから「どうしても治療をしたい」、「元気になってほしい」との要望が寄せられ、その期待に応えるかたちで修理を始めました。この修理活動から展開してきたのが、AIBO の献体、AIBO のお葬式・部品の移植、AIBO の里親探しです。

AIBO のオーナーが高齢化していくなか、どのようなお別れをするのかもテーマとなってきます。長年一緒に家族同様に生活されていたところから、われわれに献体として譲られたオーナーに安心してお別れしていただくため、イベントとして AIBO のお葬式を 2014 年 1 月より開始し、2024 年度で第 13 回となりました。

お葬式を執り行うのは、AIBO の魂をオーナーにお返しし、ドナーのように身体を部品として使わせていただく、もしくは元気のいい AIBO は高齢者施設・こども病院で、はたまた新しいオーナーのもとで新しい「犬生」をスタートしていただきたいとの思いからです。

ですから、里親探しではお客様に可愛がっていただくことは当然のことながら転売しないのが絶対条件です。

物の修理というものは、単なる製品の修理という意味ではなく、製品のオー

ナーの心の修理です。技術的にエンジニアが納得した修理をしても、実際にはオーナーが満足していないことがあります。それは修理を行う行為に伴い、オーナーの最終目的にマッチしていないことが多々発生するという事です。例をあげると、AIBO の身体の治療が終わり、顔に傷がついていたので顔のパーツを交換して納品したところ、オーナーからは「これはうちの仔ではない」とのご連絡があり、すぐに元の顔に戻したことがありました。良かれと思ってしたことですがオーナーにとっては、その傷も AIBO との歴史であり、きれいな顔になることは必ずしもオーナーにとって最終目的ではなかったのです。修理・修繕という意味において、依頼主の琴線に触れるサービスの提供とは、オーナーが本当に何を望んでいるかを知り、その期待に寄り添うことが最も重要な項目となります。

受付窓口を筆者が担当しているのは、絶えず心のアンテナを高くして、修理を依頼される方の要望はどこにあるのかを聞くことが大事と思っているからです。日本の高度成長期にわれわれが学んだ事柄は、物を大切にすること、物事について真摯に対応すること、嘘をつかないこと、そんな基本的なことを次の時代に継承することが大切だと思っていますからです。

混沌とした国際情勢の中、ひたすら生き延びることを考えるのではなく、同じ思いをもつ仲間での組織をつくり、他者の気持ちに寄り添えることが一番大切なことと思えるのです。そして、それが最終的には国際競争に勝つことにも繋がるのではないかと思います。

修理とは心の修理です。お客さまに満足していただくことが一番大切なことと考えております。

（写真提供：乗松伸幸）



写真2 AIBO のお葬式